

ベトナムの山岳仏教と李朝

大西和彦

ベトナムの正史『大越史記全書』(以下『全書』)の冒頭「鴻龐紀」には、同国の建国神話が語られている。それによれば、中国の伝説的皇帝である炎帝神農氏の後裔貉龍君がベトナムに南下し、百男を生じた。そして、その中の五十人は山精となり、残り水精となつて展開していったという。『全書』の成立は十五世紀末であつて、この建国神話の成立時期をいつ頃まで溯ることができざるを疑問であるとしても、前近代のベトナムにおいては、山と海が二極的世界観を形成し、山岳がその一翼を担っていたことが窺知される。

新石器時代の諸遺跡が示すように、古代ベトナムにおいては、まずトンキンデルタに人口の集中が現れ、中国の漢代の頃には、バクニン平野(ハノイ東北)で定着農耕が行なわれていたようである。『全書』などに示される古代説話によれば、トンキンデルタ西部に聳える傘円山(バビ山)が、同方面における山岳信仰のシンボルとなつていたことが知られる。またトンキンデルタ南方のマール川を中心としたタインホウ地方においても、前四・三世紀に溯るドンソン青銅器文化を創造した古代ベトナム人の定住が見られる。『後漢書』任延伝によれば、彼らは始め狩猟を中心として生活していたが、建武年間(AD. 二五〇-五六)太守の任延が同地方に牛耕を導入したと伝えている(卷七六、循吏)。さらに西晋の太康年間(二八〇-九〇)前後に成立したと思われる劉欣期撰

『交州記』によれば、愛州(タインホワの古名)の西にある珍山の神石廟において、太守自ら雨乞ひの儀礼を行なったことが示されており、同地方においては、農耕と密着して山岳信仰が敷衍していったことを示唆している。

一方、ベトナムには、二世紀頃までに仏教がインドから伝来していたが、その初期の展開地域は、古代ベトナムの中心地であるバクニン平野に求められると思う。すなわち同地方の南部にある嬴婁城を拠点として、後漢末にトンキンを支配した土爰(一三七? - 二二六)の伝(卷四九)には、土爰一族の出入において「胡人來獻焚香者常數十」とある。胡適氏は、この「胡人」とはインド僧を示すものと指摘されている。またベトナムの説話資料「嶺南撫怪伝」(十四世紀成立)蛮娘伝には、バクニン南辺を流れる天徳江南岸に福嚴寺という寺院があつて、住持のインド僧が人々の崇敬を集めていたと伝える。

バクニン地方は、既述のとおりトンキンデルタ内でも早期に人口集住と農業開発が見られた地域であり、前漢から唐代にいたるベトナムの中国属領時代には、嬴婁や龍編などの統治の中心都市が置かれていた。ただし、都市を中心として仏教が発展してゆく現象は、東アジア地域において顕著なものがあつて、バクニン地方もその例にもれないものと考えられる。

ベトナム仏教が山岳地帯へ進出していったことが明らかになるのは、五世紀中ばからである。すなわち黄龍の曇弘は劉宋永初年中(四二〇-二二)広州から交趾仙山寺に行き、『無量寿経』及び『観経』を誦し、考建二年(四五五)山上で焼身供養を行なつて(卷十二、身)。また交趾の人慧勝は、仙洲山寺において日々『法華経』を誦し、外国禪師達摩提婆に従つて諸観行を学び、後

中国へ入って梁の天監年間（五〇二—五〇九）に卒している（『統高僧大鑑』）。さらに交趾の人道禪は早く出家し、持戒峻嚴、仙洲山寺に住して虎害を遠ざけ、後に南齊の竟陵王蕭子良を慕って永明年間（四八三—四九三）に建康の京室を歴遊している（『統高僧傳』卷二「明律上」）。

これらの僧が存在した寺院の詳細は明らかではないが、先の仙山寺は、バクニン北方のタムダオ山塊の支脈である仙山に關連があったと思われる。また仙洲山寺の仙洲は、唐代のベトナムにおけるバクニン地方を指す行政地名としてのみ知られるものであり、この寺院もバクニン地方に存在したと推察される。

またベトナム仏教初期における系統的教派である毘尼多流支派（六—十三世紀）と無言通派（九—十三世紀）の歴代祖師の修業地や存住寺院は、バクニンとその山岳にあるものが非常に多い。特に仙遊山や慈山などの小丘が開法の場所として選ばれている。これらの小丘群周辺からは、漢代頃の民居跡が発掘されており、古くからベトナム人との關係があったことが知られる。

山岳は古代ベトナム人にとって死霊の宿る非俗の場所と考えられており、そこに仏道修業の場所として選択された理由の一つを見いだすことができるだろう。

さて、ベトナム史上最初の長期独立王朝である李朝（一〇〇九—一二二五）において、ベトナム仏教は隆盛期をむかえるのであるが、同王朝とバクニン及び同地の山岳仏教との結びつきにも顯著なものがみられる。すなわち初代皇帝太祖李公蘊（在位一〇〇九—一〇二八）は、その母范氏が、バクニン中部の山岳にある焦山寺において神人と交わって生まれたと伝えられている（『全書』本紀卷二「李紀」）。さらに即位後の太祖は、なによりも先にバクニンに仏寺を八ヶ所建立し、次に宮城（昇龍京、現ハノイ）内の宮殿建設にとりかか

っているほどである（『全書』本紀卷二「李紀太祖」）。以後の歴代皇帝も、バクニンの仙遊山、東究山、覽山に仏寺仏塔を盛んに建立し、既存のバクニン及び同地の山岳仏教界に關係をもとうとしている。一方仏教界側も、バクニン南部の法雲寺の僧が、寺中より舍利が現われたと上奏したり（『全書』本紀卷二「李紀太宗」）、仙遊山重光寺では皇帝寄進の鐘が自然にころがって寺院に入ったと伝える（『全書』本紀卷二「李紀太宗」）など、奇瑞を申し立てて帝室との結びつきを深めようとしている。

李朝は、デルタ内外に多くの半独立勢力を含む連合体であり、帝室の実権は限定的であつたと近年では考えられている。このような状況において、帝室は国家内の精神的紐帯としての役割を仏教に求めようとしたと考えられるのであり、仏教界の中心であるバクニン地方及び主要寺院の集中する同地の山岳と關係を保とうとしたことは、当然の趨勢であつたと思われる。一方の仏教界側も、あまり強力な基盤を持っていなかったにせよ、連合体の中心である李帝室と關係をもつことを有利と見て、帝室に接近していったものと思われる。本朝皇帝が山岳仏教との係わりを深めたのは、政治配慮にその理由を求められる他にベトナム人の基層信仰である自然崇拜が、一方の要因であつたと考えられる。本帝室に山岳を通じての自然崇拜があつたことは太祖が、諸名山を望拝し、自然の精霊をあがめている（『全書』本紀卷二「李紀太祖」）などでも明らかである。そして、『龍隊山寺崇善延齡宝塔碑』（一三三）（立石）などによれば人民に降雨などの恩沢をもたらす山岳を仏寺仏塔を建立する基準としているのであり、そこに自然の神秘力を仏教によって敷衍しようとする姿勢が示されていると思うのである。